

## 紫式部から伊勢大輔へ

—— 彰子サロンの文化的継承 ——

### 一 はじめに

道長時代の幕開けを印象づける慶賀の月次山水屏風らしい長保元(九九〇)年の彰子入内屏風歌の詠者は前代未聞で、花山院をはじめ公卿以上の貴紳であるのに対し、長保三(一〇〇二)年東三条院詮子四十賀屏風歌での詠者は道長に親近する藏人・受領クラスのいわゆる文人貴族によって構成されていて、左大臣道長の文治政策の反映とも言えるような対照性があり、斬新な企画性が窺われるのである。<sup>注(1)</sup>

特に後者には詠進者として輔親、為時、為義の名が『権記』同年十月八日条に掲げられているのだが、輔親は伊勢大輔の父神祇伯大中臣輔親であり、為時は紫式部の父前越前守為時で、そして為義は、中宮彰子の第一子となる敦成親王の乳母に抜擢された讃岐守大江清通の娘(栄花物語巻八「はつはな」)である「少輔の乳母」(紫式部日記)の夫で、道長の家司となる左衛門権佐橘為義である。つまり、のちの彰子サロンを支える女房たちの縁者たちが既に道長周辺に集められていた訳で、受領家司大江清通と異腹の兄である大納言兼右大将道綱の娘宰相の君豊子との結婚を含め、<sup>注(2)</sup>道長はのちに中宮彰子サロンを支える有能な女房たちの周到な人選を怠らなかった

ようである。

本稿は、彰子サロン形成期における道長文化圏の主導性をはかるため、その牽引役とすべき女房として紫式部と伊勢大輔を招集した上で、その才能の確認を経て、中宮彰子付き女房の中でも信頼のおける近侍としてその役割を任じた経緯を検証することからはじめたい。

### 二 伊勢大輔「いにしへの」歌の詠作事情

紫式部の道長家への初出仕は通説では寛弘二・三(一〇〇五・六)年であり、<sup>注(3)</sup>伊勢大輔は寛弘四(一〇〇七)年だから紫式部は伊勢大輔の先輩女房であったことになるが、両者の女房出仕時期が彰子の入内(長保元(九九〇)年)や立后(長保二(一〇〇〇)年)の時期ではないことから、通例の新規おかかえ女房の場合と異なる、特別な理由があったと察せられる。その両者に関わる周知の出来事が、のちに定家「小倉百人一首」にも採歌された「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな」の典故となる『伊勢大輔集』<sup>注(4)</sup>(流布本系)には次のようである。

A 女院の中宮と申しける時、内裏におはしましに、奈良から僧都

の八重桜を参らせたるに、今年のとりに入れ人は今参りぞとて紫式部の譲りしに、入道殿聞かせ給ひて、ただにはとり入れぬものをとおほせられしかば

いにしへの奈良の都の八重桜今日九重に匂ひぬるかな(五)

殿の御前、殿上にとり出ださせ給ひて、上達部、君達ひき連れて

よろこびにおはしたりしに、院の御返し

九重に匂ふを見れば桜狩り重ねて来たる春かと思ふ(六)

両者の出仕時期の前後関係に関わるのが、引用文中の「今年のとりに入れ人は今参りぞとて紫式部の譲りしに」であって、藤原氏の氏寺である奈良興福寺からの八重桜献上に際しその取り入れ役を新参の伊勢大輔に紫式部が譲ったという一件である。ただこの本文を解釈するに当って、「今年のとりに入れ人は今参りぞ」との指示はいったい誰が出したのかを問題にしているようで、古参の上臈女房あたりの指示であったのか、それとも紫式部自身の発言であったのか、解釈が分かれるようである。

岡氏(前掲書)は紫式部の発言とみていて、式部は今年に取り入れ役は当然自分だと覚悟していたが、機転を利かせて新参の伊勢大輔に譲ったと解したようだ。一方萩谷氏(前掲論考)は、上からの指示とみて、こう言われた限りは、二人とも新参だから、どちらかが勤めなければならず、式部はとっさに伊勢大輔に譲って、その役を回避したというのである。もちろんこの機転は歌才の誉れが高い輔親の娘伊勢大輔の力量を試すことになり、晴の場でのお披露目は皆の注目を浴びる絶好のデビューの機会であり、それに成功すれば、歓喜の渦となり、彰子後宮を盛り上げることになる。結果はまさ的に的中し、式部の機転も評価されるところとなる。

岡氏は式部の発言だとすれば伊勢大輔より一、二年先輩だと言い、それに対し萩谷氏は二人ともに新参だとする説で、いずれにしてもその根拠が問題となる。そこで前掲「九重に」歌を所載する『紫式部集』を引くこととする。<sup>注(5)</sup>

う月に、やへさけるさくらのはなを、内にて

こゝのへにほふをみればさくらがかりかさねてきたるはるのさかりか(一〇三)

『紫式部集』は「九重に」歌をあくまで紫式部の自詠として掲げているから、前掲『伊勢大輔集』の詞書に「院の御返し」とあったことを鑑みれば、当歌は中宮彰子の作詠ではなく式部の代詠であったと見做し得る。また詞書に「う月に」とあって、宮中にもたらされた満開の八重桜が季節外の初夏に存在することで、歌句に「かさねてきたるはるのさかりか」と再び訪れた春の盛りを賞揚したのだと知られることになる。しかし、この「う月」がこのまま特定できなければ、この一件は某年の四月の出来事にすぎなくなってしまう、少なくとも伊勢大輔は新参だとするその年が不明となってしまうことになりかねないが、『紫式部集』では「こゝのへに」歌に続くのが次の歌となって、その某年が特定できることとなる。

さくらののはなの、まつりの日までちりのこりたる、つかひの少将

のかざしにたまふとて、葉にかく

神世にはありもやしけん山ざくらけふのかざしにをれるためしは(二〇四)

陰曆四月の中の酉の日に行われた賀茂祭の日まで、興福寺から贈られた山桜の花が散らずに残ったので、それを中宮彰子から「つかひの少将」の挿頭に賜わり、式部がその桜の葉に歌を書いて贈ったというのである。こ

の「使の少将」とは中宮彰子がわざわざ桜の挿頭を贈るほど好意を抱く近い関係であったことからして、寛弘四(一〇〇七)年四月十九日の賀茂祭に祭使として近衛府使を務めた道長二男の頼宗(高松殿明子所生)であったと考えられている。<sup>注(6)</sup>

つまり、掲出した『紫式部集』の連続する二首が一連の関係を結び、それがまた流布本『伊勢大輔集』の詞書にある「今年」が寛弘四(一〇〇七)年のことであり、その時「今参り」であったのは、少なくとも伊勢大輔の方であり、彼女が寛弘四(一〇〇七)年に中宮彰子付き女房として初出仕したという可能性が生じ、それがほぼ確実視されている。一方、紫式部が伊勢大輔より一、二年先輩であったにせよ、新参ならなおのこと「今年のとりに入人は今参りぞ」との発言が式部の口から出たものとすれば、随分と威圧的な指示で、式部が既にそういう立場であったのか当然疑問となる。寛弘四(一〇〇七)年の時期に紫式部が中宮彰子付き女房として、どのような立場にあったのかは『紫式部日記』によって大略窺い知られることになる。そもそも紫式部の初出仕は『紫式部日記』に次のような記述があって、<sup>注(7)</sup>考証の始発点となっている。

師走の二十九日まゐる。はじめてまゐりしも今宵のことぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴れにけるも、うとましの身のほどやおぼゆ。  
(一八四頁。傍点筆者、以下同じ)

これは寛弘五(一〇〇八)年十二月二十九日の記事であり、式部の初出仕が某年の十二月二十九日であったことが明されていて、新参の当時からすれば、宮仕えにも馴れた現況を告白している。もちろん問題は某年が何年なのかということのだが、中宮彰子が出産のため土御門邸に里下りした寛

弘五(一〇〇八)年七月中旬以降を描く『紫式部日記』には作者式部の新参意識が余りにも横溢していて、従来の説のほとんどがそれに翻弄されているというのが実状なのだ。例えば、わずか数ヶ月前のことだが、寛弘五(一〇〇八)年九月十一日、若宮誕生の直前、古参の上臈女房たちと次の間に控えている式部がふともらす、「まだ見たてまつりなるほどなけれど、たぐひなくいみじ」との心境を示すが、この場合前掲傍点箇所との矛盾は、圧倒的な式部への好遇に対する卑下、謙辞として理會した方が正しいだろう。<sup>注(8)</sup>確かに宮仕え当初の式部は『紫式部集』に「はじめて内裏わたりをみるにも、ものあはれなれば／身のうさは心のうちにしたひきていま九重ぞおもひみだるゝ」(五六番歌)と、身の憂さゆえに以後里に引き籠り、翌年の五月五日ごろまでは里居を続けたらしい。<sup>注(9)</sup>その間に、出仕を促すかのように式部に献歌を求める依頼があった。

正月十日のほどに、「春の歌たてまつれ」とありければ、まだ出で立ちもせぬ隠れ家にて

み吉野は春のけしきにかすめどもむすばゝれたる雪の下草(五九)

詞書に「春の歌たてまつれ」との下令は、「正月十日」がこの年の立春に当たっているからで、式部がまだ里居であったことも詞書後半に「まだ出で立ちもせぬ隠れ家にて」とあるから歴然で、加納重文は正月十日が立春であるのは寛弘四(一〇〇七)年であること、またその前後の年は旧年中に立春であったことを指摘して、式部の初出仕は前年の寛弘三(一〇〇六)年十二月二十九日であることを明らかにしたのである。<sup>注(10)</sup>

つまり、紫式部は寛弘三(一〇〇六)年十二月二十九日の初お目見え以後、宮中(一条院内裏)に出仕したのか、それともいまだ出仕せずに里居状態

であったのか、『紫式部集』の記事から再検討をしてみても、寛弘四(1007)年四月の所在を確認し難いことになり、『紫式部集』所載歌の年次配列や前後関係を無視して、『伊勢大輔集』との年次関係を整合すべく考えようと、場合によっては、重松信弘の如く山桜の歌(一〇四)が作られた年が寛弘四(1007)年四月ならば、八重桜の一首(一〇三)は翌年の寛弘五(1008)年四月に作られたのだとするような見解も出てくることになる。<sup>注(11)</sup>しかし、それも言うまでもなく、山桜にしる八重桜にしる四月中旬まで花が散り残るのは極めて珍しい事例(加納)に違いなからうから、安易な辻褃合わせは無理というものであろう。<sup>注(12)</sup>

ただそれにしても式部は寛弘四(1007)年の正月から五月に至るまで一度も出仕せずにとりし里居を通したのであろうか。余りにも長期間に亘る欠勤状態の持続といえないだろうか。「正月十日」の詞書を記す「み吉野の」歌の次の歌にはこうある。

やよひばかりに、宮の弁のおもと、「いつか参りたまふ」など

かきて

憂きことを思ひみだれて青柳のいとひさしくもなりにけるかな(六〇)

返し

つれづれとながめふる日は青柳のいと憂き世にみだれてぞふる(六一)

式部を心配した「宮の弁のおもと」が「いつか参りたまふ」との打診で、その下句「いとひさしくもなりにけるかな」を「正月十日」からでもこの詞書に「やよひばかりに」とあり約二ヵ月ほどの音信不通の出仕拒否を貫いていると見做せる訳だが、その初句の「憂きこと」に関して笹川『全釈』<sup>注(13)</sup>は、南波『全評釈』の指摘を受け、「何らかの具体的な事柄、事件があっ

たと考えるべき」とし、また伊藤博が『新体系』の校注に記す「宮仕えに出て、何か対人関係でいやな事があったのだらう」<sup>注(14)</sup>との見解に賛した上で、笹川氏は「何か、「宮の弁のおもと」が同情するような、紫式部がひどく自尊心を傷つけられ、三ヵ月に渡って里居を続けるぐらいのひどい事件が初出仕直後に起こっていたのである。」とする。この「憂きこと」が具体的に何を指すのか不明だけれども、前掲五六番歌の内発的な「身のうさ」とは異なる「憂きこと」の発生を認知するための考証であったはずで、それを年末の慌しい十二月二十九日のお目見え直後の出来事としたり、前掲五九番歌の詞書「正月十日のほど」に続く「まだ出で立ちもせぬ隠れ家にて」を無視して、この不快な出来事を想定して年初から長期間の里居を続けていたとする判断は妥当な推定とは言えない。

なぜなら、「正月十日のほど」から六〇番歌詞書「やよひばかりに」までの二ヵ月程の期間に数日間の出仕をも排除してしまう根拠はどこにもないから、そうした数日間の絶え間がちな出仕があって、そうした折に「憂きこと」となり得る出来事が、他の女房たちとの間に起こったと考えるべきではなからうか。わざわざ「宮の弁のおもと」が式部を氣遣って便りを寄せたというのも、「弁のおもと」とそうした折にでも知己を得たと想定した方が良からうし、おそらく不快な出来事の実態は、『源氏物語』作者として中宮彰子に巧みに取り入る式部への反感や聞こえよがしの侮蔑の雑言などの類であったらう。それに対し温厚で有能な「弁のおもと」が慰めることを式部にかけたのがこの贈歌のきっかけとなったのではないかと憶測する。因みに南波氏は『紫式部日記』には中宮の女房としての「弁の内侍」の名が六箇所(七例)見られ、おそらく、この「宮の弁のおもと」と同一人であらう」と述べるが、『紫式部日記』に「弁の宰相の君」との

呼称で記されることもある道綱女豊子の可能性があると思われる。もちろん式部との親交は深く、内侍より仲の良い関係にあることが『紫式部日記』から知られるのである。<sup>注(15)</sup>

ところで、『紫式部日記』には中宮彰子と内密な時間を過ごす式部の姿が書きとめられている。

宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこ  
と知らしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬ  
もののみまひまに、をととの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけ  
ながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひ  
しかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめたう書かせた  
まひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。(二〇九―二一〇頁、傍線筆者、以下同じ)

中宮彰子が『白氏文集』に関心を寄せるようになったきっかけを考えてみるに、おそらく『源氏物語』(夕顔巻などか)に触発されたことであろうし、その享受が式部を急接近させる誘因となっていたのであろう。

この記事は、実録的日記部ではなくいわゆる消息文といわれる箇所<sup>で</sup>、寛弘六(二〇九)年に相当するが、『日記』執筆後の処理とも考えられなくはないので、ひとまず寛弘六(二〇九)年のこととすれば、傍線部「をととし」は寛弘四(二〇七)年のこととなり、その「夏ごろ」をたとえ五月中旬以降<sup>だ</sup>としても、道長や倫子に知られるようになり『白氏文集』「新楽府」と決めて教えるようになったのが五月中旬以降なのだ<sup>と</sup>解すれば、それ以前に「いとしのびて、人のさぶらはぬもののみまひま」があったはずであり、それが四月となれば、『伊勢大輔集』の当該状況Aを察し易くなる。それでもいかに中宮彰子との急な親交との反論が出るのもむしろ当然で、同

じ消息文中の記事に次のようにあるのもその根拠となり得よう。

宮の御前も、「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりけにむつまじうなりにたるこそ」と、のたまはするをりをりはべり。くせぐせしく、やさしだち、恥ぢられたてまつる人にも、そばめたてられではべらまし。

(二〇六頁)

近づきにくく、よそよそしく感じられる式部に中宮彰子も最初は「いとうちとけては見えじ」と思ったことからして、後に「人よりけにむつまじう」なったとしても、その間少くとも一年は経過していると見做すべきとの推測の方が穏当であって、初出仕からたかが数ヵ月後、しかも途絶えがちな宮仕えの状態<sup>で</sup>、その間に中宮彰子と親密な関係になったとしたら、中宮に近侍する上臈女房(恥ぢられたてまつる人)にも反感を抱かれかねない。いわば、そうした式部の性格や対人関係からして、伊勢大輔より一、二年先輩の宮仕えを主張する岡氏の寛弘二(二〇五)年十二月二十九日出仕説が成り立ってこよう。

しかし、中宮彰子と紫式部との予想外の急な親密関係は、大方の資料が示すところとなっている。本稿は式部の初出仕説で寛弘二(二〇五)年説か寛弘三(二〇六)年説かのどちらか一方に決着させることを目的とした訳ではなく、たとえ後者の立場であっても、寛弘四(二〇七)年四月に紫式部が伊勢大輔と会し、その上二人ともが新参である可能性が見出せたと思われる。たとえ式部が新参であったとしても「今年のとりに入れ人は今参りぞ」と多少威圧的な発言が、この時点で中宮彰子と親密な関係を構築し得ていれば可能となり、たまたま八重桜の取り入れ直前まで式部が『白氏文集』の一節などを教えるため、ひそかに中宮彰子に近侍していて、これが慣例

行事であることを告げられ、中宮の内意を受けてこうした発言に及んでいたのだとも推察できよう。もちろんこの発言は新参の式部にとっては無礼であり慎むべきであったろうし、上臈女房に反感を抱かれる行為であろうことは間違いないであろう。しかし、新参の伊勢大輔が取り入れ役を式部から譲られたことで、和歌の家を継ぐ歌人としての力量を晴の場で披露し得たことは、いかにも光榮な出来事であったらしく、後年、後冷泉天皇皇后四条宮寛子から「昔の八重桜」として賜わって、伊勢大輔が「面影は見しに変はらで八重桜色は昔に匂ひ増しけり」(九二)と返歌していることで、数十年後まで記憶された栄えある出来事であって、「いにしへの」歌がいかん当時に喧伝されていたのが窺い知られる(久保木)のである。また、それは紫式部の寛弘四(一〇〇七)年四月の時点での所在証明であるとともに、代詠を含めて中宮彰子に近侍する式部の機転や演出のたまものであったと言うことができよう。

ところで、実は本稿の論点はこれからであって、八重桜取り入れの場合から紫式部を消し去ってしまう異本『伊勢大輔集』の存在を俎上にしなければならぬ。<sup>注(16)</sup>

#### B 院の中宮と申して内におはしまししとき、奈良より扶公僧都とい

ふ人の八重桜を参らせたりしに、これは年ごとにさぶらふ人々た

だには過ぎさぬを、今年は返り事せよと仰せごとありしかば

いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな(二四)

院の御返し

九重にほふをみれば桜がりかさねてきたる春かとぞ見る(一五)

詞書をいっけんして知られるように紫式部の姿は消滅して、奈良興福寺

の僧都扶公の実名が記されるが、だからと言ってこの場の意義が深まるわけではなく、むしろ流布本と比較して式部の不在は躍動感に乏しい場面となっている。

この流布本との本文異同を虚構として認識しようとしたのが吉海直人<sup>注(17)</sup>で、仮にこれが物語の伝本ならば当然の発想なのだが、同一事象に対する作者の視点が異なる私家集間の異同さえも虚構の問題として捉えようとしたところが後藤祥子の反論を招いたといえよう<sup>注(18)</sup>。さらに後藤氏はここから伝本間の性格づけを試み、流布本(I類本)が年代順配列を心がけ自伝的性格の濃い本とするのに対し、異本(II類本)は「四季・恋・雑のいわば勅撰集に準じた部類仕立てで、公的性格の強いもの」とする。ただこの場合、紫式部の存在の有無が『伊勢大輔集』の伝本間にこのような差を生じさせる根拠とはなり得ないのではなからうか。つまり、問題の核心は別の箇所にあるのではあるまいか。

というのも、異本の詞書では「今年は返りごとせよと仰せごとあり」の主体は中宮彰子となり、「院の御返し」も伊勢大輔の「いにしへの」歌への返歌となってしまうのではないか。<sup>注(19)</sup> そうとなれば、異本は中宮と伊勢大輔との親近性を誇張することになり、「九重に」歌は決して紫式部の代作であってはならないことになる。さらに重要なことは、当該歌の詠作事情や年代の決め手は紫式部の欠落以上に、流布本詞書Aにある「入道殿聞かせ給ひて」とある道長の存在の有無にあって、「ただにはとり入れぬものを」の発話主体は道長であり、以下の展開も道長の主導によるところとなり、Bの「院の御返し」の対象も詞書の省略により異なっている。

ところが、後藤氏は紫式部の存在の有無だけを問題としながらも、「いにしへの」歌と「九重に」歌との関連を以下のように的確に読み解いていた。

中宮彰子の歌とされる「九重に」の歌は「いにしへの」に対する返歌ではなく、道長の後宮自慢に依えてぞろぞろと殿上から慶賀の意を述べに来た上人や公達に対して、女主人である彰子が挨拶を述べたもので、そういう文脈に置いてみると、「重ねて来たる春」は「殿上人・公達」の来訪を指すに他ならない。八重桜献上への伊勢大輔の名歌に対して、殿上人たちが賑々しく祝賀を述べに群をなしてやってきたことを、花盛りの季節の桜狩りの群に見立て、答礼を述べたのが当該歌なのであった。

二〇歳の中宮彰子のサロン形成期において、父左大臣道長の深慮によって地味で華やかさに欠ける彰子後宮に有能な女房たちを集め何とか盛り上げようとする中で、この八重桜献上の一件は絶好の機会であったに違いない。折も折今参りの伊勢大輔の存在は願ったり叶ったりで、道長は「ただにはとり入れぬものを」と返礼の詠歌を要求したところ、紫式部の機転もあって伊勢大輔は期待通りに「いにしへの」歌を詠んだのである。しかも道長はそれにとどまらず八重桜を殿上の間に取り出して、上達部や公達を彰子後宮へと誘導させたのであった。

ただ「九重に」歌の第三句「桜がり」に「桜狩り」を当て、「かさねてきたる」を上達部たちが賑々しく来訪した様を花盛りの季節の桜狩りの群に見立てた後藤説を、『伊勢大輔集』の詞書本文では献上された八重桜が季節外れの遅桜であることが知られないところで成り立つ読解として批判する笹川『全釈』(二九七〜三〇一頁)は、「桜狩り」の語が平安中期に成立していたかどうか疑わしいとし、「桜のところへ」ないし「桜のもとに」と解し、春の盛りがもう一度めぐってきたと理會すべきとの考証を示すから、両歌の関係やその趣旨についてなお考えなければならぬ点はある。

しかし、少なくとも『紫式部集』の視点が詞書に「う月に」と明記することで、季節外れの遅桜であることだけに焦点を絞っているとの笹川氏の指摘は、私家集間での作者の視点の相違をいう本来の後藤氏の疑義に対する一つの回答ともなっていると考えられる。『伊勢大輔集』の各伝本間に内在する問題を焦点化するものとして、当該歌に関する流布本と異本との詞書の相違が紫式部の有無にのみ従来の視点では注がれていて、かんじんの彰子後宮運営に関わる道長の詞書での欠落を見過ごしたまま議論がすすめられてきた一面もあつたのではないかという危惧を表明しておきたい。

### 三 歌人紫式部の矜持

伊勢大輔「いにしへの」歌にまつわる伝承は後代資料の一つ『古本説話集』上巻「伊勢大輔歌事」では次のようにある。<sup>注(20)</sup>

いよく心ばせずぐれて、めでたきものにてさぶらふほどに、伊勢大輔まいりぬ。それも歌読みの筋なれば、殿いみじうもてなさせ給。奈良より、年に一度、八重桜を折りて持て参るを、紫式部取り次ぎて参らせなど、歌読みけるに、式部、「今年は大輔に譲り候はむ」とて、譲りければ、取り次ぎて参らするに、殿、「遅し〜」と仰せらるゝ御声につきて、

いにしへの奈良の宮この八重桜今日九重に匂ひぬるかな

「取り次ぎつるほど〜もなかりつるに、いつの間に思ひつゞけけむ」と、人も思ふ、殿もおぼしめしたり。(四一六〜七頁)

右『古本説話集』は紫式部の存在を確保する彰考館本系統(流布本)に典拠しているとする前掲吉海論考は、紫式部の登場しない『袋草紙』(上巻、雑談)は書陵部本系統(異本)を典拠資料としているから、その清

輔『袋草紙』をも引いておく<sup>(注21)</sup>、

伊勢大輔、上東門院の中宮と申す時、初めて参れり。輔親の娘なり。歌読むらんと心にくく思し食す間に、八重桜をある人進る。御堂御前に御座す時、件の花の枝を大輔が許へさしつかはして、御硯の上に檀紙を置き、同じくさしつかはしたるに、人々目を属けていか申すと見あへるに、とばかり有りて硯ひきよせて、墨をとりあげ静かにおしりて、歌を書きてこれを進る。御堂とりて御覧するに、誠にきよげにかきたり。

古へのならのみやこの八重ざくら――

殿を始め奉りて、万人感歎し、宮中鼓動すと云々。また、かの人の第一の歌なり。卒爾にも寄らざる事か。  
(一一八頁)

となり、紫式部の影が全く見えず(後藤)などという次元の変容ではなく、異本『伊勢大輔集』とは逆に道長の関与が増幅して、中宮彰子を度外視しての伊勢大輔への詠歌要請場面となっている。

そもそも異本『伊勢大輔集』は詞書に「院の御返し」などとあるばかりで、道長の影さえ全く見えないのだから、『袋草紙』が異本を典拠資料にしているなどという根拠は全く成り立ち得ようもない。『袋草紙』は和歌の家の出自である伊勢大輔に硯と紙とを用意してまで和歌を催促する道長の段取りにみごとに応えて秀歌を詠んだという後代説話にすぎない。それでも道長の関与をいうならば、注目すべきは『古本説話集』の「殿、「遅し／＼」と仰せらるゝ御声につきて」の箇所であろう。

菊地仁は前掲『古本説話集』「伊勢大輔歌事」とほぼ同文を掲げる『世継物語』を示しながら「遅し／＼」の表現を和歌の頓作説話の系譜上に位置づけようとしている。<sup>(注22)</sup> それは『栄花物語』(巻三、さまざまのよろこび)

において、永延二(九六)年十一月、賀茂臨時祭の還立で、撰政兼家が盃を賜った舞人源兼澄に祝歌を所望した際、一首を句を次いで捻出すように順次詠みつづけていく途中に、興じた兼家が「おそしおそし」とその次の句を催促した逸話が『袋草紙』(上巻)にも所載されているのだが、一句ごとの停滞につけ、三度の「責められ」が使用されていることと同一視して、『栄花物語』が伝える撰政兼家からの「おそしおそし」という催促にはかならないとした。

しかし、重要なのは『古本説話集』「伊勢大輔歌事」の「遅し／＼」は伊勢大輔の歌才への熱い期待表出であり、またその期待通りに秀歌を詠出し得たことへの感嘆を示す言辞を忘れてはいないことである。つまり、『栄花物語』『袋草紙』の兼澄の一件では、撰政兼家が褒賞として着ていた衣を授けていることで知られるにしても、それはその結果に対する賛嘆や褒賞であって、『古本説話集』における「取り次ぎつるほど／＼もなかりつるに、いつの間に思ひつゞけけむ<sup>(注23)</sup>」と、詠進の即応性に関わる感嘆の言辞を設置する講釈は、『袋草紙』引用文中の「とばかり有りて(硯ひきよせて)」との趣旨とは明らかに相違していると思ななければならぬ。「遅し／＼」を表出する説話を当座の機智による即詠説話(菊地)という系譜上に位置づける場合も慎重な見極めが必要となろう。それにしても『伊勢大輔集』諸本には道長の「遅し／＼」と記された伝本が一つもないのだから、秀歌を即詠説話化するための脚色と見られなくてはならない。

ところで、和歌の即詠性に関わる作法としては『枕草子』にも周知の逸話を書きとめられている。当時の歌壇の第一人者である藤原公任が雪の散らつく二月末ごろに、上の局に中宮定子の供をしていた清少納言のもとへ、懐紙に「すこし春ある心地こそすれ」と書いて主殿司にとどけさせたので

ある。むろんこの上句を詠めとの試みだが、清少納言は『白氏文集』『南  
秦雪』の詩句が踏まえられていることを看破して、みごとに上句を付けた  
というのである。『枕草子』(三巻本)第一〇二段と『古本説話集』上巻「清  
少納言事」での連歌の上句を付けた箇所のみ限定して引用しておく。<sup>注(24)</sup>

#### 枕草子

主殿司は、「とくとくとく」と言ふ。げにおそうさへあらむは、いと取り所なければ、  
「さはれ」とて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。

(二〇九〜二一〇頁)

#### 古本説話集

「げに今日のけしきにいとよくあひたるを、いかゞ付くべからむ」と思ひわづ  
らふ。

空冴えて花にまがひて散る雪に

と、めでたく書きたり。いみじく褒め給ひけり。

(四一九頁)

両者の歌句の異同は措くとして、前者の『枕草子』では主殿司に「とくとく」とせかされ、「げにおそうさへあらむは」と下手なのに加えて遅く  
なってしまうことを忌避して書くのに対し、後者の『古本説話集』では「思  
ひわづらふ」とあって秀句を付けることに熟考する時間経過を想定でき、  
返歌の遅くなってしまうことに無頓着だといえよう。さらに前者に「わな  
なくわななく書きて」とあるが、後者では「めでたく書きたり」とあるの  
も、「めでたく」を上句の出来映えの意味と解せるにしても、前者との対  
照からすれば、その書風の流麗をも含めて理合すべきであるのは、伊勢大

輔の「いにしへの」歌の件で、『袋草紙』には「誠にきよげにかきたり」  
とあったことに対応し、秀歌への賞賛に加えて即詠の視点ばかりではない  
説話化の方向もあり得るのだといえよう。

さて、私家集や説話集において同事象を採録するに当って異なる視点で  
の説述を確認してきたのだが、紫式部には日記と歌集という執筆及び編纂  
意図が異なる二様の実録的形態の著作がある。日記は既に指摘したように  
新参女房を盾にして中宮彰子に近づき難いことを装い、虚構性を疑わざる  
を得ないが、主人道長との関連歌は日記と歌集との重複歌と見做してよい  
だろう。まず日記冒頭部における土御門邸での道長登場も極めて作爲的だ。  
煩瑣になるが、歌集と並記させて引用しておく。

#### 紫式部日記

渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだ落ちぬに、  
殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらはせたまふ。橋の南なるをみ  
なへしのいみじうさかりなるを、一枝折らせたまひて、几帳の上よりさしの  
ぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝がほの思ひしらる  
れば、「これ、おそくてはわろからむ」とのたまはするにことつけて、硯のも  
とによりぬ。

をみなへしきかりの色を見るからに露のわきける身こそ知らるれ

「あな疾」とほほゑみて、硯召しいづ。

白露はわけてもおかじをみなへしころからにや色の染むらむ

(一一二五頁)

#### 紫式部集

あさぎりのをかしきほどに、おまへのはなども、いろく〜にみだ

れたる中に、をみなへし、いとさかりなるを、との御らんじて、  
ひとえだ、をらせさせたまひて、几帳のかみより、「これ、たゞに  
かへすな」とて、たまはせたり。

をみなへしさかりのいろをみるからにつゆのわきける身こそしらるれ(七七)

とかきつけたるを、いとくく

しらつゆはわきてもおかじをみなへしこゝろからにやいろのそむらむ(七七)

日記は彰子の皇子誕生によって道長家の繁栄が政治的に盤石となりいや増すことを記しとどめる一つの目的をもつが、この女郎花の一枝をめぐる一介の女房と主人との贈答歌が「わが朝がほの思ひしらるれば」によって、男女関係の私的なアプローチとも誤解しかねない和歌的ないし物語的空間を形成しているといえよう。<sup>(注25)</sup>

萩谷朴が「道長の意志を迎えようとする一種の閨怨にもひとしい式部の心情が隠されている」<sup>(注26)</sup>とするのも道理で、「殿ありかせたまひて」と、式部の視線は殿道長の動きに釘付だ。しかし、「これ、おそくてはわるからむ」との道長からの発語が式部の妄想を打ち消し、道長の意図が和歌の所望であったことにはっと気づかされている。廣田氏は「男女間の関係に焦点が定まっているのではない」としながらも、日記と歌集との表現異同を「殿」と「私」との関係のあり方の差異として、次のように述べている。<sup>(注27)</sup>

『紫式部日記』は、女房と隨身たちの存在を捉えうる位置に視点が据えられているのであり、「殿」と「私」の歌は、衆人環視の中での唱和である。階層化されつつ、大勢の女房に囲まれながら、その一員として「私」があるという位置、「私」の視線のうちに捉えられるという視点の据え方はやはり変わらな  
い。『紫式部集』では、「殿」は「たゞにかへすな」というのであり、速さよ

りも難題をどのように解決するかを試すものとして表現されている。だから「賜はせたり」なのである。「女郎花」が焦点化され、「殿」と「私」との関係はあたかも一対一の関係でもあるかのように浮かび上がらせることにおいて、唱和が成り立っている。  
(七七、八頁)

日記では確かに隨身や他の女房の存在を無視して、「私」と「殿」との関係が成り立っているわけではないが、だからこそその中で選ばれた「私」が衆人環視の中で「殿」の期待にこたえて、「をみなへし」歌を詠むのであり、「あな疾」と意に叶った歌だから、道長はご満悦なのである。一方、歌集の方はそうした場の状況を削ぎ落としているため、あたかも「殿」と「私」との関係が一対一でもあるかのように浮かび上がっているであろう。それが廣田氏の言うように「浮かび上がらせる」ということであれば、作爲的に「女郎花」を焦点化し、道長の「しらつゆは」歌に「いとくく」を付けたということになる。

また、この場での道長と式部との間に事実として女郎花の一枝に関して贈答歌があったことを、日記では「をみなへし」歌に道長が「あな疾」とほほゑみ<sup>(注28)</sup>で、その即詠を賞賛しているのに対し、歌集の詞書では道長歌の方に「いとくく」を付け、返歌の素早さを指摘して、それを小町谷照彦のように二作品間の事実と虚構という問題に還元させるのではなく、廣田氏は日記と歌集との相互補完的な解釈を退け、「おまへのはな」であるところから「をみなへしさかりのいろ」に道長の繁栄よりも「今を時めく中宮」<sup>(注29)</sup>を見出し、「身こそしらるれ」が「皇子ぞ知らるれ」に転換していくとするが、この論理は、『紫式部集』の存立意義を日記とは別に確認する視座を提供している。

しかし、『紫式部集』の意義はそこにとどまらず、「これ、たゞにかへすな」との道長の発語が、『伊勢大輔集』で八重桜の一枝の取り入れに際し、道長から発せられた「ただにはとり入れぬものを」（前掲A）との対照を喚起せずにはいられないのであり、「殿」と「私」との一対一への傾斜化が公的な祝歌からその詠者を抽出して、『伊勢大輔集』であればむしろ異本系Bの「九重に」歌の下句「重ねて来たる春かとぞ思ふ」が、彰子付き女房として有能な紫式部に加えて、さらに伊勢大輔が続いて出仕してきたことを喜ぶ中宮詠となり得る可能性があらう。

なお『紫式部集』「しらつゆは」歌の道長詠においても、その下句「ころからにやいろのそむらむ」が、公任の道長への撫子献上時の詠歌「にほひうすき垣ほのかげのなでしこは心からにや色もますらん」<sup>注(30)</sup>（傍線筆者）を踏んでいるとするならば、公任が寛弘元（一〇四）年十月二十一日、藤原齊信に位階を越えられて以来、内裏に出仕しない状態であったことをも含んで、「しらつゆ」を道長の恩沢、「をみなへし」を式部とし、道長が式部に對し長の里居をせずに忠勤に励むよう促したとも解せよう。

ところで、公任と紫式部との接触が知られる『紫式部日記』では彰子第一皇子敦成親王誕生の五日夜の産養（道長主催）において宴の終わり近く、女房たちにも盃が巡り、祝歌を詠進する機会があったらしい。

#### 紫式部日記

上達部、座を立ちて、御橋の上にまゐりたまふ。殿をはじめたてまつりて、攤<sup>た</sup>うちたまふ。かみのあらそひ、いとまさなし。歌どもあり。「女房、さかづき」などあるをり、いかがはいふべきなど、くちぐち思ひこころみる。

めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代をめぐらめ

「四条の大納言（公任―筆者注）にさしいでむほど、歌をばさるものにて、声づかひ、用意いるべし」など、ささめきあらそふほどに、こと多くて、夜いたうふけぬればにや、とりわきても指<sup>さ</sup>さでまかてたまふ。（二四五―六頁）

#### 紫式部集

みやの御うぶや、いつかの夜、月のひかりさへことにくまなき、  
水のうへのはしに、かむだちめ、とのよりはじめたてまつりて、  
ゑひみだれ、のゝしりたまふ。さか月のをりに、さしいづ。

めづらしきひかりさしそふさかづきはもちながらこそ千世をめぐらめ（八六）

式部の「めづらしき」歌は、日記では当夜披露されたのではないらしいの<sup>注(31)</sup>に對し、歌集の詞書文末には「さしいづ」（傍線箇所）とあって、事実矛盾が生じている。

この矛盾に関してもさまざまな見解が出されているが、歌集の詞書には公任の存在はなく、差し出す相手の喪失が期待と不安の混じる思案を無為にしている実状があったのであらう。原田敦子は「この歌は、おそらく公任退出後、女房の無念を見てとった道長に指名されて献詠したものであるから、両者の記す事情はそれぞれ誤りではないであらう。」<sup>注(32)</sup>とするものの、日記が公任の動向に視点を置いた叙述は、祝歌を贈るべき相手を取り違えて「ささめきあらそふ」他の女房たちの中で、その落胆を代弁するかのよう<sup>注(33)</sup>に据え置かれていて、その式部の「めづらしき」歌は拍子抜けで中ぶらりんだ。むろん祝歌の対象を見失った状況を設置しない歌集の「めづらしき」歌は道長の指示に拘らず定位されているのであらう。

ところが、紫式部が彰子の第一皇子誕生の祝宴において、仕える女房の中で祝賀の和歌を詠進するにあたって道長によって選ばれた存在であるこ

とが明らかになるのは酔った公任に「あなかしこ、このわたりに、わかむらきさやさぶらふ」とからかわれた五十日の宴の折の出来事であった。

### 紫式部日記

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、ことはつるままに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに、東面に、殿の君達、宰相の中將など入りて、さわがしければ、二人御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらはせたまひて、二人ながらとらへ据ゑさせたまへり。「和歌ひとつづつ仕うまつれ。さらば許さむ」とのたまはず。いとほしくおそろしければ聞こゆ。

いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば

「あはれ、仕うまつれるかな」と、ふたたびばかり誦せさせたまひて、いと疾うのたまはせたる、

あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ

さばかり酔ひたまへる御心地にも、おぼしけることのさまなれば、いとあはれに、ことわりなり。(二六五―六頁)

### 紫式部集

御五十日の夜、とのうたよめとのたまはずれば

いかにいかがかぞへやるべきやちとせのあまりひさしき君が御世をば(八八)

との御

あしたづのよはひしあらばきみが代のちとせのかずもかぞへとりてむ(八九)

儀礼的な祝歌は定型表現を用いた類型的な詠法を順守するところに、その有効性を発揮できると理會されていて、その場の状況を的確におさえた掛詞も効果的な技巧となつてゆく。この場合は、式部歌の「いかに(如何に)」が「五十日に」を掛けて、若宮の長寿と「君が御代」の繁栄を寿いでいる。

しかも泥酔している道長の前でことさらに大仰な表現(廣田)を用いて詠進していると察せられる。それにも拘らず、道長はひどく感嘆し、「あしたづの」歌を「いと疾う」(傍線箇所)唱和したのであった。

道長が「いと疾う」応じたことが、即興性を重視する詠法の道長的文化性に根差していることだろうが、それが成立するためにはお互いの信頼と、儀礼・儀式における非日常的な時空に限らず、詠歌対象への日常的な深い思いやりの心情が根底にあってのことで、技巧以上に尊重されるべき背景の存在が日記には叙述されていた。

廣田論考は繰り返し「『紫式部日記』に比べて『紫式部集』は殿と私との対偶に重きを置いている」と説くが、それは詠作事情の状況説明を極力削ぎ落としている詞書の表現が、「殿」と「私」との一对一の構図を自然と浮かび上がらせているに過ぎないのであって、それは持続的な主従関係を確保することにはなるが、どのような結び付きのもとにその関係性が成り立っているのかについては無頓着なのである。両者ともが事実であるにしても、時間的な継起の中で公私の住み分けの温度差という点で、その意味の重層性や含蓄性の相違は歴然としてこよう。言い換えれば、記録と記憶の温度差とすることができよう。

ここで再び日記冒頭に据え置かれた式部の「をみなへし」歌と道長の「白露は」歌の関係振り返れば、日記と歌集における「あな疾」と「いとく」の位置の逆転は、詠歌の即興性にのみ関わる問題ではなく、「あな疾」が式部の歌人としての力量を試し、その信頼性を構築するための道長の行動であったことが知られ、道長歌の「をみなへし」は多分に式部の出仕を気遣う心性が読み取られてこよう。

いま五十日の祝宴の余韻の中で、中宮の御帳台の後ろに隠れている宰相

の君と式部を、わざわざ几帳を取り払い衆人環視の状況を設定して、道長は祝歌を要望したのである。期待はずれの祝歌を詠進して道長を失望させ恥をかかせることは許されない状況が形作られ、「和歌ひとつづつ仕うまつれ」（傍線箇所）との要請に、上臈の宰相の君豊子を差し置いてまで、式部は「いかにいかが」歌を発する。あくまで道長の信頼を得ての詠出であって、「和歌ひとつづつ仕うまつれ」は道長の宰相の君に対する顧慮がある。要請であろう察しは、式部にはついたらはずで、『紫式部集』陽明文庫本の詞書には「のたまはすれは」以下に「ひけしてあしけれと」と記され、おそらくこの「ひけ」は卑下で宰相の君に遠慮しての詠進をいうのであろうが、そもそも集の詞書では宰相の君と二人に対して殿が歌よめと言ったことにはなっていないから、意をなさない謙辞であろう。

ともかく道長と式部との間に、祝賀の儀という晴の舞台で末席に連なる女房たちの中から選ばれ、唱和を成立させる信頼関係が築かれていて、式部の歌人としての存在性が日記において誇示されているのである。南波『全評釈』が「道長は風雅の遊びを巧みに演出するすぐれた演出者であり、式部はまた、そのような演出に巧みに踊ってみせる、すぐれた演技者であつ」（四二九頁）たと評するのに首肯されるが、日記の目的が彰子サロンのPRだとする説には同調できない<sup>注35)</sup>ている。

彰子サロンの形成期において、道長の文化的期待にそう唯一の女流歌人として式部がそのお眼鏡にかなう存在であることをアピールしているのだと言えよう。しかも『源氏物語』の作者でもあるという自負が漲っている。それは最愛の皇后定子を失って悲嘆に沈む一条天皇と中宮彰子との仲をとりのつたのが他ならぬ『源氏物語』であるという自負なのであろうし、その結果として彰子の第一皇子誕生によくこぎつけた父道長の慶賀に参画

できた誉れの証しは、儀式・儀礼には取り上げる必要もない一介の女房の祝歌を、あえて主人である道長が取り立てていったという仕儀に現れており、式部は紛れもない物語作者としての功労を自ら書きとどめたのであった。寛弘五（一〇〇六）年という彰子の皇子誕生でようやく道長の外祖父としての権力構造の確立に関わる時期において、伊勢大輔が道長周辺で歌人として評価され活動する余地は初出仕時の八重桜の一件以来はばなかったのかもしれない。

#### 四 紫式部と伊勢大輔との邂逅

『紫式部日記』が『枕草子』を意識しているからといって定子皇后と清少納言のような和気あいあいとした主従関係が描かれることはなく、『紫式部集』にしても中宮彰子に近侍する女房としての姿が写し出されることはない。式部は中宮に寄り添う影のような存在として代詠を残していて、それを「女房たる私は、中宮の役割を演じることを課せられている」と説くのは、廣田収であった<sup>注36)</sup>。『紫式部日記』にも宮仕え当初のころの彰子を評して「まだいとをさなきほどにおはしまして」（一九七頁）とし、日記の執筆時期つまり寛弘七（一〇〇八）年ごろには「いまは、やうやうおとなびさせたまふ」（同）となるのも、彰子が二十三歳になってのことであった。

一方『伊勢大輔集』にしても、中宮彰子に近侍する女房としての大輔の姿が記されるのはわずかで、その中に寛弘六（一〇〇九）年初夏ごろと思われる和泉式部の初出仕に際し出迎えたのが大輔で、その詞書に「和泉式部、院に参りてはじめたる夜あいして、ものなど言へとおほせられしかば……」（二六頁）とあって、彰子の指示のもとに対面が実現された。流布本『伊勢大輔集』によって、紫式部↓伊勢大輔そして伊勢大輔↓和泉式部

へと、初出仕時に当時の才女たちが中宮彰子サロンで女房としてつながっていき実態が窺い知られるのは貴重だといえよう。

そこで、八重桜の一件以来、だいぶ後年のこととなるのだが、紫式部のもう一つの接点が『伊勢大輔集』に記されている。

紫式部、清水に籠りたりしに参りあひて、院の御料にもろともに

御灯奉りしを見て、櫛の葉に書きておこせたりし

心ざし君にかかぐるともし火の同じ光にあふがうれしさ(二七)

返し

いにしへの契りもうれし君がため同じ光に影を並べて(二八)

紫式部と伊勢大輔とが清水寺で偶然行き合った折の贈答歌である。詞書に「院の御料」とあり、歌中に「君」とあるのは、二人の主人である彰子を指すのであろうが、太皇太后であった彰子は万寿三(一〇三〇)年の正月に出家し、院号を上東門院とし(左経記)、以後女院と呼ばれることになる。『伊勢大輔集』では詞書に「女院」ないし「院」と記されるけれども、例えば一三番歌の詞書「三条院御時、院の里におはしましし時……」(二九頁)とあっても、三条天皇在世中のことであるから、寛弘八(一〇三三)年十月即位から長和五(一〇三〇)年一月讓位までの期間であり、彰子は中宮から皇太后へ寛弘九(一〇三三)年二月十四日に転上(日本紀略)しているし、この「里」は一条院崩御(寛弘八(一〇三二)年六月二十二日)以後移った枇杷殿である。一三番歌詞書は彰子がいまだ皇太后であったにも拘らず「院」と記している。つまり、伊勢大輔より高齢な紫式部が当該歌の詞書からすれば、枇杷殿に共に移っているようでもないし、そうとすれば彰子付きの女房を式部はこの時既に退いていたことになり、その進退を含めた動向が気になると

ころである。

『紫式部集』終末部には長和二(一〇三三)年、身の憂さを分かちあえた同僚であり親友であった小少将君の死を悼む歌が残されていて、それが彰子付き女房としての立場上の区切りとも思われ、当該清水参籠時の伊勢大輔との贈答歌もそうした年代に位置づけられており、今井源衛は道長に批判的な立場をとる小野宮実資と内通したとの嫌疑で長和二(一〇三三)年の秋の末から初冬のころ、紫式部は宮廷から追放されたのではないかと推測したのであった。<sup>注(37)</sup>しかし、この紫式部宮廷追放説に関しては痛烈な反論が角田文衛や河内山清彦<sup>注(38)</sup>にあつて否定され得るに至っている。それにしても実資と皇太后彰子との取り次ぎ役を果たしていた紫式部が寛仁三(一〇二五)年正月五日(小右記)に再びその姿を現わすまで約五年間に及ぶ長期不在の理由が解き明かされたわけではなかったのである。

彰子と父道長との間に意思疎通が困難となり、しばしば対立することになったのは、定子所生敦康親王の立太子の件であった。そういう状況下で、実弟頼通と図って猶子敦康親王を具平親王女(頼通正妻隆姫の妹)と長和二(一〇三三)年十二月十日(御堂関白記)に結婚させた。当然敦康親王が立太子し、将来即位することになれば、その正室は后となるはずだから、紫式部は将来の後教育を彰子から委ねられて、具平親王女付きの女房として出向を命じられていたため長の不在となっていたのではないかと愚考したのであった。<sup>注(40)</sup>

地味で内気な彰子がもの言う后へと変貌していたのが確認できるのは、『小右記』長和二(一〇三三)年二月二十五日条で、度々の饗宴を「益悪事」として停止させた皇太后彰子を実資は「可申賢后、有感々々」と称えていることでも知られる。こうして彰子周辺に変化が起きる長和二(一〇三三)年

という時期の後に皇太后彰子が重篤な病となり病床に臥せていたことが知られるのも『小右記』の長和三(二〇四)年正月二十日条の次の記事である。

皇太后宮日来不予之由人々云々、仍黄昏参入、以二位中将令啓達、被仰自去  
十三日惱氣御坐由、秉燭後罷出。

当該記事(掲出したのは前半一部のみ)によって実資が彰子の病氣見舞に訪れたところ、いつもの取り次ぎに出てくる「相逢女房」(割注に越後守為時女)つまり紫式部ではなく、二位中将頼宗が応接したというのである。

彰子の病氣は十三日以来日増しに悪化していったようで、このような時期に紫式部と伊勢大輔とが、彰子の病氣平癒祈願に清水寺参籠で偶然行き合った時の贈答歌ではなかったのかと岡一男説に従って推察したのである。<sup>注(41)</sup>ただ贈答歌自体の内容は彰子のための祈願というよりも親身に仕える女房同士の絆が表立っているように感じられる。<sup>注(42)</sup>

和歌的修辞としては仏前に供える櫛の葉に書いた式部の贈歌上二句「(心ざ)し君」<sup>きみ</sup>に読み込まれ、それを受けた大輔の返歌の二・三句「(うれ)し君」<sup>きみ</sup>として対応する技巧的な贈答歌として成り立ち、まず上句に主君彰子への誠意を表出するのは当然であろう。しかし、この贈答歌を櫛を歌に読み入れた物名歌としてのみ注目するのではなく『源氏物語』との関わりで理會すべき贈答歌であって、彰子サロンの文化的継承が『源氏物語』を紹介して紫式部から伊勢大輔へと引き継がれていることを確認できるのである。つまり、河内山清彦は若菜下巻において尚侍朧月夜の出家を聞き及んだ光源氏が恨みの歌を贈ったのに対し、朧月夜は「濃き青鈍の紙にて、櫛にさしたまへる」形で、「あま舟にいかかは思ひおくれけむ明石の浦にいさりせし君」<sup>注(43)</sup>(二六二頁)と末句「(いさりせ)し君」に「(しきみ)を織り込ん

で返歌している例を挙げた。しかしむしろ清水寺での贈答歌では伊勢大輔の答歌(一八)にこそ積極的に『源氏物語』の世界になぞらえ取り成していることとする姿勢が顕著で、その末句「影を並べて」が初音巻冒頭、年頭の祝賀場面での光源氏と紫の上との唱和に依拠した表現であることを指摘したのは、中西智子であった。<sup>注(44)</sup>まずは初音巻を引用しておこう。

「今朝この人々の戯れかはしつる、いとうらやましう見えつるを、上には我(鏡餅ヲ筆者注)見せたてまつらむ」とて、乱れたることどもにすこしうちませつつ、祝ひきこえたまふ。

(源氏)  
うす水とけぬる池の鏡には世にたぐひなきかげぞならべる

げにめでたき御あはひどもなり。

(紫の上)  
くもりなき池の鏡によろづ代をすむべきかげぞしく見えける

何ごとにつけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞こえかはしたまふ。今日は子の日なりける。げに千年の春をかけて祝はんに、ことわりなる日なり。

(二四三―二四五頁)

清水寺での紫式部と伊勢大輔との贈答歌で主君彰子のために祈る灯明の同じ光に照らし出された影を並べる二人の絆の固さと、正月の祝いの席で二人の深い契りを確認し合う光源氏と紫の上との池の鏡の影とが対応する連帯性を中西氏は次のように説明している。

物語作者「紫式部」からの贈歌に対する伊勢大輔の返しには、「しきみ」を用いて若菜下巻の仏教的雰囲気如初音巻の慶賀の要素を重ねつつ、家の女房(中将の君)によって千年の長寿を祈念される源氏を女院彰子に、また幾久しい契りによって結ばれた源氏と紫上との仲を紫式部と伊勢大輔との固い友情に、

それぞれ置き換えた複雑で重層的な『源氏物語』引用があるのではないかと推察されるのである。

彰子サロンに『源氏物語』を共有することで育まれた女房たちの連帯感が根づいていることは「影を並べる」ばかりではなく、「同じ心」という表現にも託されていることは近年再々論じてきたが、彰子サロンの中核メンバーでしかも式部が信任する伊勢大輔が主導的役割を果たし得ることをこの返歌で確信したのであろう。続く『伊勢大輔集』一九・二〇番歌でも、式部は早速「松、雪の氷りたりしにつけ」（詞書）で、「奥山の松葉に氷る雪よりも我が身世にふるほどぞ悲しき」（一九）とたたみかける。これは椎本巻において八宮死後の寂寥に耐え忍ぶ姉妹の唱和を踏んで無常の世を生きる利那をかみしめ嘆く心境を吐露して、同世代の小少将を亡くしたばかりの哀惜を後輩伊勢大輔と分かちあえる存在との認識のもとに仕掛けた贈歌ともいえ、上句「奥山の松葉に氷る雪よりも」が中の君詠の「奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば／うらやましくぞまたも降りそふや。」（二〇五頁、傍線筆者）の上句を採り入れて、かけがえのない友を失って悲傷する式部なのだが、その下句「我が身世にふるほどぞ悲しき」に小野小町の「花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに」（古今集、春下、一一三）が引かれているのを指摘したのも同じく中西智子であった。次のように説明している。

紫式部は「我が身世にふるほどぞ悲しき」と小町詠に拠りつつ無常を嘆じ、そこから伊勢大輔は八宮および大君の「露の命」を連想することで、贈り手の思いを受けとめたと解釈できよう。両者はこの機会に互いを睦まじい姉妹である大君と中君に見立て、宇治の姉妹の物語に小町の「花の色は」詠の無

常観が底流していることを改めて確認したと思われる。この贈答歌は『源氏物語』の「作り手」側の人々によって物語の内容が捉え返され、二次的な解釈が与えられた例として重要である。

椎本巻に限らず総角巻の大君の死をも抱撰する宇治の姉妹物語が対照化されているとの認識はともかく、一つの場面に限定化する必要のない小町詠の引用であり、人の命のはかなさを普遍化するからこそ伊勢大輔の返歌「消えやすき露の命にくらぶればげにとどこほる松の雪かな」（二〇）が成り立っていよう。それにしても大輔詠の下句「げにとどこほる松の雪かな」にどうしても反転させようとする大輔の意識があり、式部の生への執着を促す訴えとなっている。それは中の君の詠歌に付け加えられた「うらやましくぞまたも降りそふや」と照応し、雪が新しく降り加わることで消え残って積っていくように、松の氷りついた雪にわずかな期待を込めたのだろう。このように『源氏物語』撰取が伊勢大輔との贈答歌に顕在化していることを確認したが、なお全容については明晰な中西論考に委ねることとして、大輔の式部への尊崇の念が、しからしめた手法について改めて指摘しなおすことにしたい。というのも既に掲出した清水寺での式部の贈歌は櫛の枝葉につけた手紙に書かれていたわけではなく、櫛の葉自体に書かれたものであった。草木の葉に和歌を書くという行為は、特殊な技能であるはずだが、笹川博司『紫式部集全釈』（三〇三〜四頁）が検索した用例の中にも『和泉式部統集』（七）に櫛の葉に書かれた例があるほか、「竹の葉」「梶の葉」「柿の下葉」「萩の下葉」「榊の葉」「橘の葉」など多く例が挙げられている。それにしても式部にとって稀有な行為でなかったことは、これも既に掲出済みだが、寛弘四（一〇〇七）年四月十九日に賀茂祭の勅使となった近衛少将

頼宗の挿頭に散り残った八重桜の一枝を下賜するに際し、「神世には」歌を桜の葉に書いて式部は贈っていたのであった。

一方、大輔も異本(Ⅱ類本)『伊勢大輔集』に「さがみがひさしくおとせざりしかば、木の葉にかきて／木の葉だにかぜのたよりにとひくるにひとこそ人をわすれはつめれ」(四九)と、木の葉に和歌をしたためて相模の安否を気遣っている。相模との親交は、父輔親を亡くした頃(長暦二(一〇三〇)年)にもその贈答歌(九二―九五番)によって支え合える女流歌人として赤染衛門とともに和歌の道への精進を誓った仲だったことが知られる。<sup>注(47)</sup>

このように葉に和歌を書くという行為が、掛詞として意味を重層するばかりではなく、親愛の情を込められる手法として特定の人物関係における連環が成り立ち得る可能性があったのではないか。その中で、葉に書かれた和歌を受け取る立場の大輔にもう一例を拾うことができる。

院の白川殿におはしますころ、右大殿もおぼすことありげなるに、

大宿直に候ひ給ふつとめて、木の葉に書きて賜はせたりし

世の中に吹き寄る方もなきものは木の葉散りぬる木枯の風(六一)

返し

落ち積もるこの山里の木の葉をば返しの風も吹き返さなむ(六三)

紫式部没後既に二十数年の月日が経っている。女院彰子はわが子後朱雀天皇崩御(寛徳一(一〇四)年一月十八日)の悲しみを癒すため寛徳二(一〇四五)年閏五月十五日(扶桑略記)から約二年ほど白川殿に滞留した。もちろん伊勢大輔も同行していたのであり、この頃には彰子にとって欠くことのできない近侍の女房となっていたことは間違いないであろう。

その白川殿に頼宗が訪れてきたのは久保木『注釈』の指摘通り寛徳二(一

〇四)年の秋から冬にかけてのことであろうし、またその頼宗が木の葉に和歌を書いたとしても木枯らしの吹く季節柄を捉らえての趣向に過ぎなかったかもしれないが、贈られた木の葉から時を逆さまにすませる風を吹き込もうとする大輔の歌意は、頼宗の気落ちしたやるせなさを何とか慰めようとしている温情に満ちているといえよう。それはちょうど過往の松の水りついた雪を逆手にとって切り返していった歌風と同じで、信頼に伝えようとする大輔のあたたかい声援となっていると見做せよう。

ところで、当詞書「右大殿もおぼすことありげなるに」<sup>注(48)</sup>について、「右大殿」が教通か頼宗かの考証が後藤祥子によってなされていて、いずれにしても右大臣となるのは、教通が永承二(一〇四)年で、頼宗は康平三(一〇六〇)年だから、編集時での官職が関わるにしても、「おぼすことありげなる」が、特に後朱雀天皇に入内させた頼宗女麗景殿女御延子に父帝没後の同年四月、正子内親王が誕生していることもあり、同じく後朱雀帝には教通が生子を入内させているからとは言え、頼宗の方に悲嘆と落胆が深からうし、女院彰子との親昵性から言っても後藤氏の指摘通りで教通よりも頼宗の方が適わしいと言っただろう。<sup>注(49)</sup>頼宗が伊周の長女と結婚し、残された伊周の次女を彰子が女房として引き受けたのも、定子所生の敦康親王を猶子としていたことからの奇縁であろうし、頼宗女延子が一品宮脩子内親王の養女として長久三(一〇四)年に入内したのも彰子との共同歩調であったろう。

また相模が夫大江公資との離縁後、脩子内親王家の女房としてあるいは歌人として活躍するのも伊勢大輔とつながる相模の存在に頼宗の仲介があったのかもしれないし、平安後期の歌人たちが好んでモチーフ(歌材)とする「木の葉」や「時雨」は、つながる女房たちの詠歌によって成熟していったとも考えたい。その根底に『源氏物語』とりわけ宇治十帖の時空が

先例となり得る可能性がある。

○薰詠（橋姫巻）

山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわが涙かな

←

○相模詠（新勅撰和歌集、雑下、一一〇三）

木の葉散る嵐の風の吹くころは涙さへこそおちまさりけれ

○頼実詠（後拾遺集、冬、三八二）

木の葉散る宿は聞きわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

## 五 皇后宮寛子春秋歌合における出詠歌差し替え事件

伊勢大輔は晴の歌の舞台となる、長元五（一〇三三）年十月十八日「上東門院彰子菊合」、永承四（一〇三九）年十一月九日「内裏歌合」、永承五（一〇四〇）年四月二十六日「前麗景殿女御延子歌絵合」、永承五（一〇四〇）年六月五日「祐子内親王歌合」、天喜四（一〇三六）年四月三十日「皇后宮寛子春秋歌合」などの歌合に出詠した。

この中で天喜四（一〇三六）年の皇后宮寛子春秋歌合において伊勢大輔に関わる事件が勃発したのである。むしろ四条宮寛子皇后に仕える下野にとつて忌まわしい事件と言った方が適切であるかもしれない。その事件の全容はほぼ『四条宮下野集』<sup>注(50)</sup>によって知ることができる。

### 四条宮下野集

(イ)宮の歌合、世にのゝしりて、日記あることなればこれは書かず。秋の方人にて、それが方の上達部、殿上人など、「たゞわがためのことぞ」、「よむべきたびぞ」

などあれど、このこと定め騒ぐに、いとゞ紛れてよまれず。言ひ心みしことども、住吉詣での所（四六五〜六頁）

(ロ)方人の民部卿のもとにて選られしに、方のく集まりて、宮の亮師基、「御歌三つ入りぬ」と告げをこせたまへりしほどに、女院より「これを」と仰せられたるとて、「伊勢大輔がに二つは替へられぬ」と口惜しがりたまひしこそ、その折うれはしかりしか。（四六七頁）

(ハ) 五月五日、あなた方の大夫隆国のもとへさし置かず

今日さへや淀のみぎはのかひもなくあやめも知らぬ人のためには（七八）

後冷泉天皇の皇后寛子は長元九（一〇三六）年生まれで、十五歳の時入内した。『扶桑略記』永承五（一〇三九）年十二月二十一日条に「関白左大臣藤原朝臣頼通息女寛子初入内裡。母中務卿具平親王女。贈従二位源朝臣祇子也」とあり、また永承六（一〇四〇）年二月十三日条には「関白左大臣息女女御従四位下藤原寛子冊以為皇后。年十六歳」とある。

関白左大臣頼通の正室具平親王女隆姫に子が誕生しない状況下、頼通にとつて寛子は秘蔵の実娘であり、先帝後朱雀朝の後宮には敦康親王女源子を養女にして入内させたものの、祐子内親王と祿子内親王の姉妹のみで皇子の生誕を見ず、後宮政策に行き詰まり実弟教通や異母弟頼宗の娘たちの入内を招き、頼通に焦慮があったのだろう。愛娘寛子のにわかな入内も頼宗三女昭子の入内を押しつけるような形となっていた（栄花物語巻三十六根あはせ）。

また寛子の母祇子は前掲『扶桑略記』に「具平親王女」と記されるものの、倫子女房であった進命婦とも言われ、素姓も怪しく謎多き女性で、『栄花』に拠れば入内当日寛子に付き添って参入したらしいのである。彰子の

みならず母鷹司殿倫子にとっても好ましからざる事態であったのではなかったか。

今上帝後宮には中宮として後一条第一皇女皇子内親王が、女御として教通三女歎子がいたが、入内の翌年には立後の儀となり、順当ならば中宮が皇后に転上するはずだが、「ただかくてあらん」と中宮皇子の意向を『栄花』は単に記し、寛子を皇后とした。中宮呼称は定子と二后並立の際、道長がこだわったところで、頼通にしても嫡子女王の立后では、中宮禎子内親王（妍子所生）を皇后に転上させ、禎子の反発を招いていた。つまり、彰子方を顧慮した妥協の皇后呼称の選択であった可能性があろう。

というのも、後冷泉天皇（親仁親王）の母尚侍嬪子は彰子の妹で、東宮敦良親王（のちの後朱雀天皇）妃であったが、親仁出産後、万寿二（一〇三三）年八月五日に早世した。太皇太后宮彰子が親仁親王の乳母に紫式部の娘賢子を抜擢したことはよく知られているが、嬉子亡き後、彰子が親仁親王を土御門邸に迎え取り養育することになった。「女院またなきものに思ひきこえさせたまへり」（栄花、巻二十七ころものたま）とは、その後の彰子の可愛がり様をいう。

一方、後一条天皇の中宮威子（彰子の妹）は、長元九（一〇三〇）年九月六日に崩御したため、<sup>注(51)</sup>遺児皇子、馨子内親王も女院彰子の土御門邸に引き取られることとなった。その頃には親仁親王は高陽院殿に転居していたようである（栄花、巻二十三きるはわびしとなげく女房）。そんな二人が奇き縁で結ばれることになる。皇子が十二歳の長暦元（一〇三〇）年十二月に後冷泉はまだ東宮（十三歳）の頃、参入したのである。すなわち、彰子にとって後冷泉天皇や皇子・馨子内親王は大切に養育したミウチそのものであって、特に姉の皇子には白川殿に転居の際、土御門邸を譲っている。頼通の愛娘

寛子が後冷泉天皇に入内する永承五（一〇三五）年当時、中宮皇子は二十五歳となり、「今が盛りの風情」（栄花、巻二十六根あはせ）なのである。

こうした女院彰子にまつわる人物関係からすれば、頼通の後冷泉後宮への寛子参入はいかにも性急で、姉彰子との協同から離れ独自路線を歩み出した感が強いのである。皇后宮寛子春秋歌合の開催はその六年後で寛子も二十二歳となるが、やはり寛子主催というよりも頼通の後援があつてこそ真名日記と仮名日記をとまなう盛儀歌合と言った方が適切であろう。それにしても頼通の反応や動静が天喜三（一〇三五）年五月三日の六条齋院禊子内親王家物語歌合に比して知られないのである。

さて、清水彰『全釈』で「出詠歌すりかえ事件」と呼ばれて被害者となる下野は寛子付きの中堅女房であつたらしく掲出した引用文(イ)では、右方秋の方人を選ばれ、念人の上達部や殿上人に出詠をすすめられている、いま売り出し中の女流歌人と言ったところであろう。<sup>注(53)</sup>『下野集』には試作歌九首が掲載されていて、一方『伊勢大輔集』では詞書に「皇后宮の歌合」とあつて、「月」（七二番）「雁」（七三番）「山田」（七四番）「祝」（七五番）の題で各一首ずつ計四首が所載されているので、その題と内容上から四首とも下野歌と重なっていることになる。つまり、左方春と右方秋は各々異題であるから、伊勢大輔は下野と同じく右方となる。『廿卷本類聚歌合』に拠れば当該歌合は十番であり、左方は一題一方人の出詠歌となっているのに対し、右方は下野の詠歌が最初三首も右方の方人の頭である民部卿長家のもとで選出されていたのだから変則的で、彰子のひとりで突然二首も伊勢大輔の詠歌に差し替えられて、下野が不快な目に合うことになるのも、左右の選歌方針が異なる特殊形式の歌合だったからであろう。

掲出引用文(ロ)がこうしたトラブルの裏事情を語っているにしても、右方

の情報が明子所生の末子だが倫子の養子となった長家から彰子に伝えられていたゆえであり、<sup>注(54)</sup>「仮名日記」を書いている伊勢大輔の功労を表面的には評価してのこと<sup>注(55)</sup>だろうけれど、頼通の寛子後宮への不満がこうした行為に彰子を走らせたとも考えられよう。つまり、彰子の行為は少なくとも下野への個人的な意趣返しなどというのではなく、偶然下野の詠歌が三首も選出されてしまったがゆえに、下野はそのとばかりを受けたというのが事の真相ではあるまいか。まして伊勢大輔にとって高階成順との間に生まれた娘の筑前(康資王母)が寛子家の女房として仕えていることから、あえて波風を立てる必要は微塵もなかったといえよう。

しかし、この差し替えによって当該春秋歌合はその様相が一変してしまったといえる。十番の左右の題と出詠者を一覧にしてみる。<sup>注(56)</sup>

左		右	
一番	臨時客 内の式部	月	伊勢大輔
二番	春日祭 藤原範永	七夕	土佐
三番	桜花 藤原頼宗	駒迎	下野
四番	鶯 源隆国	鹿鳴草	美濃
五番	子日 源顕房	雁	伊勢大輔
六番	梅 相模	鹿	藤原長家
七番	若菜 少納言	山田	伊勢大輔
八番	柳 宮の内侍	紅葉	藤原長家
九番	春雪 但馬(範永妻)	菊	藤原長家
十番	祝 御製	祝	伊勢大輔

方人、出詠者の顔ぶれからすると、左方は大略頼通の息のかかった公

卿(隆国、頼宗、顕房)やその一人である源師房お抱えの歌人(範永、相模)で構成し、右方は大方寛子家の女房中心の人選で組合わせが考えられているのかもしれない。長家が右方の撰者でありながら自作歌三首を選び、男性唯一の出詠者となることからしても最初から何らかの意図をもっての対処であったのかもしれないが、それならば下野歌三首を選ばなかったであろう。結局下野歌二首を伊勢大輔二首と差し替えることによって、寛子家女房の土佐(源貞亮女、下野(下野守源政隆女)、そして美濃(源頼国女、祿子家宣旨と姉妹)の三者一首ずつとなり、右方は寛子家女房中心とのみろみ崩れ、右方彰子方と左方の頼通方との番という構図となり様変わりしてこよう。すなわち、下野歌二首の変更により歌合自体が言わば彰子にのっとられてしまった感があり、皇后寛子の面目は丸つぶれというに近い様相である。

左方の一番である内の式部命婦(内裏女房)<sup>注(57)</sup>と、十番の後冷泉天皇御製は当初から決まっていたとすれば、十番に売り出し中の下野では畏れ多いとの判断があれば、当初から和歌の家で実績もある伊勢大輔歌を番う配慮が働いていたとも考えられる。あくまで憶測だが、一番左は客分としての立場であるとすれば、寛子女房である下野を当初配する予定であったのかもしれない。そうは言っても下野歌のどの歌を差し換えたのかは一つ一つを特定できない。

いずれにしても『伊勢大輔集』に所載された四首全てが、当該歌合の出詠歌となり、高齢の大輔にとっては最後を飾るにふさわしい晴の舞台となったことは間違いないだろう。一方、下野にとっては遺恨の歌合となり、掲出引用文(ハ)の如く、当日四番左歌の出詠者であり、皇后宮大夫である源隆国にその憤懣をぶつけている。下野の「今日さへや」歌は、嫌味を含み多

少感情的になっているきらいもあるが、当該歌合の結果が右方は一勝五負、四持であったことに自信のあった下野にとってやる方ない思いがあり、もし自分の出詠歌ならば左方に勝っていたとでも言いたかったのであろうか。

それにしても、久保木『注釈』が解説する通り一番歌は晴儀歌合では左方が勝つのが通例であるし、また十番歌の御製に対して伊勢大輔歌が負となるのはいわば当然の結果であらう。ただ五番右の雁題の出詠歌「小夜ふけて旅の空にて鳴く雁はおのが羽風や夜寒なるらむ」には歌評(判詞?)として「まことに身に泌<sup>し</sup>む歌也。内殿をかしがらせ給ふ。されど左、夜ふたつと申す」とある。つまり当歌には「小夜」と「夜寒」と「夜」が二つあり、それを左方が論難したのである。いわゆる歌病であって、それが理由で伊勢歌は負となっても致し方なく、結果として伊勢歌は全敗となる。のちに大輔は当歌を家集に収めるに当って初句を「衣薄み」と直して所載しているから、その難に納得しての修正であったのであろう。

そこで下野歌はどうかと言えば、三番右の歌題「駒迎」の一首「引く駒の数よりほかに見えつるは関の清水の影にぞありける」には判詞「水の影に見ゆとあるところを心得ずとて」とあり、内大臣頼宗歌に負けている。しかし、当歌合では頼宗は左方の頭でありながら判者も務めており、最初から不公平さは拭えない。<sup>注(59)</sup>ところがまたそれは、頼通と彰子との板挟みの状況の中で、逆に両者への付度を排除して公平に判を下さざるを得なかった状況であるとも言え、当歌合は相互の思惑が入り乱れ複雑で、左の念人であるはずの源隆国が四番歌題「鶯」で出詠者となっている点など疑義が実に多いのである。

ともかく寛子女房である下野の歌二首を伊勢大輔歌に差し替えさせたことは、女院彰子の権威による圧力を見せつけたに違いなく、その背景に頼

通の強引な後宮政策への反発を潜ませ、たとえそれが伊勢大輔への最後の花道を設定する好意から出たことだとしても、下野という寛子女房のひとりに怨みを買ったことは、伊周一統にさえ温情厚く、清廉な彰子にとって唯一の汚点となってしまうかねない権力行使であったかもしれないのである。

## 六 おわりに

頼通の文化的宮為は父道長の批判的勢力取り込みを意図する対外性とは異なり、藤原摂関家の基軸たる姿勢をミウチに誇示する傾向にあった。後朱雀朝における後宮政策の躓きから、後冷泉朝後宮では実娘寛子の入内によって、祐子・祿子両内親王のもとで催される数多くの歌合への情熱からその性質を変容させていったと言い得ようか。

井上新子は皇后宮寛子春秋歌合に関して、「不安な時勢の中にあって、頼通は盤石な摂関家の権威を文化的に演出し予祝の空間を現出させることによって、時代を覆う暗い空気を払拭し、将来にわたる摂関家としての頼通一族の繁栄、それに支えられた皇室の弥栄を祈念しようとしたのではないか」と述べるが、皇室よりもまさに「頼通一族の繁栄」を主体とする予祝空間の演出に力を注ぐように変貌していったようで、彰子が既に藤原摂関家からその基軸を皇室に移している思念とは異なる様相にあったといえよう。

というのも、永承四(二四九)年の内裏歌合にしても、萩谷朴が関白家歌合にも及ばない規模で行われたと言い、その実相も後冷泉天皇の意志は全く反映されず左大臣頼通の采配と方人の協議がそれを代行して、「内裏歌合の実際の指導が、天皇から摂関に移り、内裏歌合の主目的が、君臣の和<sup>注(61)</sup>楽よりも、和歌文芸の競技に重点を移したことの象徴であらう」と述べる

ところで、念人が出詠者となったり判者を勤めるような変則的な状況がま  
ま生じることなども撰閑家の影響があるのかもしれない。

ともあれこうした晴儀歌合の中で『源氏物語』撰取を方法的に開示して  
いったのは伊勢大輔ではなく、紫式部の娘である大式三位賢子であった。

例えば、永承五(二〇五)年の祐子内親王歌合では、題を「鹿」とする十三  
番左歌が賢子(典侍)の「秋霧の晴れせぬ峰に立つ鹿は声ばかりこそ人に  
知らるれ」であり、同題で一五番左歌が伊勢大輔の「夕霧に妻惑はせる鹿  
の音や夜寝る萩もおどろかすらむ」であった。賢子歌の「晴れせぬ峰」は  
浮舟巻で薫と匂宮との間で苦悶する浮舟の心中を詠む「かきくらし晴れせ  
ぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばや」から決別したかけがえのな  
い表現として歌中に組み入れられているのに対し、大輔歌は夕霧巻で小野  
の里に落葉の宮を訪れる夕霧の姿をイメージできるとしても前掲贈答歌に  
比して明示性に欠け『源氏』引用として定位できないであろう。伊勢大輔  
の『源氏』引用はあくまで紫式部との私信の次元で機能していたのだとい  
えようか。次代の賢子も彰子サロンの一員であったのだから、その基盤を  
胚胎に生成していった文化的継承の確かな足跡であったはずだ。

注

- (1) 田島智子「道長と屏風歌―長保三年東三条院詮子四十賀屏風を中心に―」(『和歌  
文学研究』72、平成8(一九九六)年6月)
- (2) 久下「大納言道綱女豊子について―『紫式部日記』成立裏面史―」(『昭和女子大  
学「学苑」915、平成29(二〇一七)年1月。のち『源氏物語の記憶―時代との交差』武  
蔵野書院、平成29(二〇一七)年)
- (3) 寛弘二年説を主導するのは岡一男『源氏物語の基礎的研究』(東京堂、昭和

29(一九五八)年、寛弘三年説は萩谷朴「紫式部の初宮仕は寛弘三年十二月廿  
九日なるべし」(『中古文学』昭和43(一九六八)年3月)。以下両氏の考説は同論  
考に拠る。なお近時、中野幸一「紫式部の彰子中宮出仕の年時―『紫式部日  
記』の記事を軸として―」(『王朝日記の新研究』笠間書院、平成7(一九九五)年)は  
寛弘元年説を言う。

(4) 引用は流布本(丁類本)系の三手文庫蔵本を底本とする久保木哲夫『伊勢  
大輔集注釈』(貴重本刊行会、平成4(一九九二)年)に拠る。なお彰考館蔵本も  
同系統である。

(5) 引用は実践女子大学蔵本を底本とする笹川博司『紫式部集全釈』(風間書房、  
平成26(二〇一四)年)に拠る。なお以下笹川『全釈』と略称する。

(6) 『御堂関白記』寛弘四(二〇〇七)年四月十九日条に中宮使は蔵人頭実成であ  
ったことが知られ、その中宮使を差し置いて中宮から挿頭を受ける頼宗は  
異腹とは言え時の人だったということになる。なおこの考証を的確に説  
くのは、式部の寛弘三年初出仕説を継ぐ増田繁夫『評伝紫式部―世俗執着と  
出家願望―』(和泉書院、平成26(二〇一四)年)である。

(7) 引用は小学館新編日本古典文学全集本(中野幸一校注)に拠る。

(8) 掲出した傍点二箇所本文意は厳密には違うけれども、彰子に近侍する女房  
にとつての宮仕え生活に慣れるという点から同僚女房たちからの嫉視やい  
やがらせ等を含む総体として考えている。

(9) 『紫式部集』「薬玉おすとして」の詞書を記す(六六三)(六六四)番の贈答歌  
に拠る推定である。しかし宮中において式部の在、不在の確証とはならない。  
加納重文「紫式部の初宮仕年時」(『古代文化』昭和47(一九七二)年7月。のち『源  
氏物語の研究』望稜舎、昭和61(一九八六)年)。但し「み吉野は」歌を立春の詠と  
することを疑った安藤重和「紫式部初出仕年時考」(『平安文学研究』昭和62(一  
九八七)年5月)がある。『紫式部集』の歌配列と歌句の表現性に立脚した反論  
だが、これとて流布本『伊勢大輔集』の寛弘四年四月に宮中で紫式部の

存在を前提としている。

- (11) 重松信弘『紫式部と源氏物語』(風間書房、昭和58(一九八三)年)
- (12) 但し、伊勢大輔の出仕は『紫式部日記』寛弘五(一〇〇六)年の記事で確実視され、また寛弘四(一〇〇七)年は閏五月があつて、岡一男前掲書には「それに今年は閏年で五月が加はつてゐるから、四月は太陽暦に換算して、今の四月末頃の気候で、遅桜も大和の山里には咲いてゐたらう。」(二二五頁)との見解もある。
- (13) 南波浩『紫式部集全評釈』(笠間書院、昭和58(一九八三)年)三四六頁。
- (14) 伊藤博『新日本古典文学大系24』(岩波書店)『紫式部集』三四二頁。
- (15) 『紫式部集』一〇六番歌の詞書に「弁の宰相の君」と記して寛弘六(一〇〇九)年の五節のころ里居の式部に出仕を促す例がみえる。呼称表記の相違が気になるところではある。またこの記事はちょうど宇治十帖で大君の病床に寄り添う薫が京の豊明の節会を思いやっている場面が総角巻にある。秋山虔他『紫式部集全歌評釈』(国文学)学燈社、昭和57(一九八二)年10月)には「人々の心の浮き立つ五節の行事をよそに、里居の式部はあの宇治十帖の暗澹たる世界を織り紡ぐ営みを生きていたのではなかったか」(二三三頁)と推測している。この見識に賛する。
- (16) 異本とは本稿では後藤祥子「伊勢大輔集覚書」(森本元子編『和歌文学新論』明治書院、昭和57(一九八二)年)での分類呼称「部類本系統(Ⅱ類本)」を指す。なお引用は同系統の東海大学図書館蔵伝藤原良経筆本を所収本とする『新編国歌大観』(角川書店)に拠る。但し私により適宜読点を付し漢字を当てた。
- (17) 吉海直人『紫式部集』「九重に」歌をめぐつて(南波浩編『紫式部の方法』笠間書院、平成14(二〇〇二)年)
- (18) 後藤祥子「家集の虚構の問題―伊勢大輔「いにしへの」をめぐつて―」(宮崎荘平・伊藤博編『王朝女流文学の新展望』竹林舎、平成15(二〇〇三)年)。例えば「紫式部」とする流布本に対し、「藤式部」とする異本との相違を挙げる。以下同論

考からの引用である。

- (19) 「いにしへの」歌は『詞花集』(春、二九)に採歌されるが、その詞書に「一条院の御時、奈良の八重桜を人のたてまつりて侍りけるを、その折御前に侍りければ、その花を賜ひて歌詠めとおほせられければ詠める」とあり、「御前」には伊勢大輔が中宮彰子付き女房との知識がない限り、「歌詠め」との下令ともども一条天皇ということになるう。
- (20) 引用は『新日本古典文学大系42』(岩波書店)に拠る。
- (21) 引用は『新日本古典文学大系29』(岩波書店)に拠る。
- (22) 菊地仁「職能としての和歌」(若草書房、平成17(二〇〇五)年)「遅し遅し」―説話と歌論との雁行―
- (23) 「ほどく」について、『新大系』脚注は「ほど」一つは衍字ともみうるが、小世継に「取つぎつる程、殿の仰られつる程もなかりつるに」とあり、「ほど」の目移りによる誤脱か。(四一六頁)とする。いちおう「取り次ぎつるほど、ほどもなかりつるに」と解す。なお「御声につきて」に関しては、「御声に従つて」というよりも、「御声につづけて」と解し、即座にの意を含むと理會する。
- (24) 引用は『新編日本古典文学全集18』(小学館)に拠る。
- (25) 辻和良「紫式部」と道長周辺文化圏(高橋亨編『紫式部』と王朝文芸の表現史)森話社、平成24(二〇三二)年)は、道長と光源氏との重なりとして当該場面と夕顔巻における六条御息所の女房中将の君との贈答場面を捉える。その中将の君が「とく」と返歌し、「公事にぞ聞こえなす」ことが本稿の意図するところだが、久下は既にはやく「女郎花」と「朝顔」との対偶性を物語や日記に見出し論じている。『平安後期物語の研究』(新典社、昭和59(一九八四)年)「狭衣物語」結末部の考察―朝顔と女郎花をめぐつて―参照。
- (26) 萩谷朴『紫式部日記全注釈上巻』(角川書店、昭和46(一九七二)年)七四頁。
- (27) 廣田收『紫式部集』歌の場と表現』(笠間書院、平成24(二〇三二)年)

- (28) 小町谷照彦『紫式部日記』の和歌（『日本文学』昭和47（一九七二）年10月）
- (29) 南波『全評釈』四二三頁。
- (30) 『御堂関白記』寛弘二（一〇〇五）年七月二十一日条に公任の来訪が記録されている。当歌との関連は妹尾好信『御堂関白集』読解考―第二歌群・寛弘二年詠の部―（広島大学『古代中世国文学』14、平成11（一九九七）年12月）に指摘され、平野由紀子『御堂関白集全釈』（風間書房、平成24（二〇一三）年）がそれを支持している。
- (31) 公任はこの当時従二位中納言兼左衛門督で皇后宮大夫であり、権大納言になつたのは寛弘六（一〇〇九）年であるから、日記執筆時の作為であろう。
- (32) 原田敦子「日記と家集の間―紫式部日記と紫式部集」（『中古文学』20、昭和52（一九七七）年10月。のち『紫式部日記紫式部集論考』笠間書院、平成18（二〇〇六）年）
- (33) 日記本文に「歌どもあり」とあって、現に『公任集』（四条大納言集）に「中宮の御うぶ屋の五日の夜／秋の月影のどけくも見ゆるかなこや長き夜の契成らむ」（二四四）と、その時の詠歌が収載されている。公任歌を差し置いて自身の歌のみを書き記すことに躊躇があつたのかもしれない。またこのように式部歌が放置された例は、九月九日の重陽の節句に倫子に菊の着せ綿をプレゼントされた礼歌「菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代はゆづらむ」（二九頁）がある。受け手の喪失が詠出の意味を無効にしている例だが、公任にしても女房詠に対しての評価や期待がないのだろうか。
- (34) 久保田孝夫・廣田収・横井孝編『紫式部集大成』（笠間書院、平成20（二〇〇八）年）に拠る。
- (35) 妹尾好信『王朝和歌・日記文学試論』（新典社、平成15（二〇〇三）年）『紫式部日記』の執筆契機と対「枕草子」意識」は道長による彰子サロンPRの目的で日記を執筆させたとする。なお古井美弥子『読む源氏物語 読まれる源氏物語』（森話社、平成20（二〇〇八）年）『紫式部日記』論―「女／男」へのまなざし―では、日記を政治的広報誌とする。
- (36) 廣田前掲書『紫式部集』における女房の役割と歌の表現
- (37) 今井源衛「晩年の紫式部」（『王朝文学の研究』角川書店、昭和45（一九七〇）年。のち『今井源衛著作集第3巻紫式部の生涯』笠間書院、平成15（二〇〇三）年）
- (38) 角田文衛「道長と紫式部―「戸を叩く人」の問題―」（『紫式部の身分』古代学協会、昭和40（一九六五）年）「実資と紫式部―「小右記」寛仁三年正月五日条の解釈―」（『紫式部とその時代』角川書店、昭和41（一九六六）年）『紫式部伝―その生涯と『源氏物語』―』（法藏館、平成19（二〇〇七）年）
- (39) 河内山清彦「紫式部は宮廷から追放されたか（上）（下）―今井源衛氏の『実証』の虚妄―」（『古代文化』昭和53（一九七八）年2、3月。のち『紫式部集・紫式部日記の研究』桜楓社、昭和55（一九八〇）年）
- (40) 久下「頼宗の居る風景―「小右記」の一場面―」（昭和女子大学『学苑』879、平成26（二〇一四）年1月。のち前掲『源氏物語の記憶―時代との交差』）
- (41) 岡前掲書一三五頁。
- (42) 大輔詠の初句「いにしへの契り」は大輔が宮仕え当初紫式部に譲られて「いにしへの奈良の都の」歌を詠んで、二人でともに主君の栄花を寿いで以来、再びこうして彰子のために共に祈ることができた縁と理會する。
- (43) 河内山清彦「源氏物語の物名歌―伊勢大輔集所載紫式部歌との関係―」（『解釈』昭和55（一九八〇）年12月）
- (44) 中西智子「紫式部と伊勢大輔の贈答歌における『源氏物語』引用―「作り手」圏内の記憶と連帯―」（『日本文学』平成24（二〇一三）年12月）
- (45) 「同じ心」に関しては尾高直子『信明集』歌物語化歌群の影響―「おなじ心―」（お茶の水女子大学『国文』101、平成16（二〇〇四）年7月）が先駆的論考だが、久下に「後期物語創作の基点―紫式部のメッセージ―」（考えるシリーズ4『源氏以後の物語を考える―継承の構図』（武蔵野書院、平成24（二〇一三）年））がある。また「影を並べる」に関しては、久下「物語の事実性・事実の物語性―道雅・定頼恋愛綺譚―」（考えるシリーズII（知の挑発）③平安後期頼通文化世界を考え

- る―成熟の行方』武蔵野書院、平成28（二〇一六）年。のち前掲『源氏物語の記憶―時代との交差』等。但し、これらの用語が『源氏物語』を基点とするのか、それとも彰子サロンの流行を『源氏物語』が掬い上げたのかは不明だが、『源氏物語』の好評がさらにブームに火をつけたのは事実であろう。
- (46) 大輔の返歌第四句「けにとゝこほる」を異本（Ⅱ類本）は「うらやまれぬる」とするのは、この行文を採り入れたとし、中西氏は「Ⅱ類本を頼通に献上する際、より『源氏物語』の本文を深くふまえた形に整えたためという見方も可能となろうか。」とする。
- (47) 大輔の夫高階成順が亡くなった頃（長久元（一〇四〇）年八月十四日―拾遺往生伝）の相模の弔問歌も家集（一〇〇番歌）に収載されている。
- (48) 後藤祥子前掲「伊勢大輔集覚書」
- (49) 彰子は永承二（一〇四二）年白川殿から引き移った邸宅の主基貞は頼宗の四男である。なお彰子と頼宗との関係は高橋由記「藤原頼宗について」（前掲『平安後期頼通文化世界を考える―成熟の行方』）参照。
- (50) 引用は『新日本古典文学大系28』（岩波書店）に拠る。
- (51) 『扶桑略記』長元九（一〇三三）年九月六日条に「中宮藤原威子崩ズ。年三十八。皫瘡ノ患ヒニ依ルナリ」とある。
- (52) 清水彰『四条宮下野集全釈』（笠間書院、昭和50（一九七五）年）一二七頁。
- (53) 下野は永承六（一〇五五）年正月八日庚申六条齋院祿子内親王歌合に三首、天喜四（一〇五五）年閏三月六条院祿子内親王歌合に二首出詠している。
- (54) 上東門院彰子と長家との間は良好であった。井上宗雄「藤原長家の生涯」（『国語文』昭和49（一九七四）年2月。のち『平安後期歌人伝の研究増補版』笠間書院、昭和63（一九八八）年）
- (55) 萩谷朴『平安朝歌合大成四』（一〇九四頁）は「上東門院菊合」「麗景殿歌合」の仮名日記ともに伊勢大輔作の可能性を述べる。
- (56) 清水『全釈』はむろんのこと堀部正二『纂輯類聚歌合とその研究』（京都美

- 術書院、昭和20（一九四五）年。復刻版大学堂書店、昭和42（一九六七）年）や萩谷朴『平安朝歌合大成四』等を校勘してのことで、『廿卷本歌合』の本文そのままではない。
- (57) 『廿卷本歌合』では「小式部命婦」とあるが改めた。
- (58) 清輔『袋草紙』（下巻）に「これは左右なく病なり」（岩波新大系29、二九九頁）とある。
- (59) 永承四（一〇四四）年内裏歌合では源師房が右方の念人でありながら、判者を勤めている。
- (60) 井上新子『堤中納言物語の言語空間』（翰林書房、平成28（二〇一六）年）『逢坂越えぬ権中納言』と歌合の空間」
- (61) 萩谷朴『平安朝歌合大成三』（九〇七〜九二二頁）
- (62) 「はれせぬ峰」の歌語についての『源氏』引用は中周子「大式三位賢子の和歌における『源氏物語』享受の―様相」（『和歌文学研究』79、平成11（一九九六）年12月）に指摘がある。なお中氏の「大式三位賢子の和歌―贈答歌における古歌撰取をめぐる―」（『樟蔭女子短期大学紀要 文化研究』13、平成11（一九九六）年）をも参照すると、『源氏』歌をも含めて濃やかな古歌引用の贈答歌は、伊勢大輔の技法を継承しているとも言え、女房たちの横の繋がりや他に紫式部↓伊勢大輔↓大式三位賢子という縦の繋がりも認めても良いのではないかとと思われる。
- 〔付記〕 本稿「五 皇后宮寛子春秋歌合における出詠歌差し替え事件」は、昨年二月八日に開催された本学「日本文学研究会」における発表「ある日の彰子の怒り」に相当する内容である。その発表要旨は本誌に掲載されているので、併せて読みたい。

（くげ ひろとし 本学名誉教授）